

【翻 訳】

社会学の構造変容

マシュー・デフレム 著
久 慈 利 武 訳

【梗概】 この10年にわたる公共社会学の登場は社会学における一連の危機運動の終焉を表現する。1950年以来、特に1960年代に、社会学は保守的で現状維持に寄与すると見なされたので、危機にあるといわれてきた。結果として1970年代は社会学の過激化を目撃し、1980年代は社会学の一般的衰退をみせた。1990年代の盛り返しによって、危機の支持者は公共社会学の題目の下に、重く政治武装した社会学への更新されたコミットメントの形を取った復讐をしに戻ってきた。公共社会学はまったく制度化され広く支持された見方である。社会学においては、1960年代の影響が40年遅れで切実に感じられ始めた。

序論

1960年代以来のアカデミック文化の発展を背景にして、アメリカ社会学の制度化の展望と問題点を論じる。特に社会学の学会組織と高等教育における社会学の教え方と学び方への影響に絞って。社会学の創設者によって構想された社会学の役割を描くことから始める。近代社会学の発達の中で、わたしは社会学がしているべきことをしていない、従って社会学は何らかの危機状態にあるという観念にとりつかれていることを明らかにするつもりである。1960年代のある種の文化潮流はこの観念を増幅し、以後の社会学の実践、特に社会学の学会組織と高等教育での教え方の面に大いに影響を与えてきた。

社会学と社会が特別に結びついていたという単純な事実を所与とすれば、他の社会科学が味わわなかった仕方で60年代は社会学に特別に影響を与えたことは別に驚くことではない。1960年代に叫ばれた西欧社会の危機は社会学が危機の状態にあるという議論を巻き起こした。もっと衝撃なのは、はるかに知られることが少ないのは、より最近の数十年は、社会学において危機の観念が再び盛り返した反応を見せていることである。しかも旧来の危機防衛者が予測したり、他者が恐れるものをはるかに超えたインパクトをもって。社会学の危機運動の歴史のコンテクストに位置しながら、私はこれらの発展が社会学の学会組織にとってもつ含意と、アメリカの大学における社会学の状況を論じる。他の変容としては、社会学が真

の性質を回復するには教育の道徳的役割の更新が必要であることを論じる。

1. 社会学の約束

近代社会学への発展において、タルコット・パーソンズの名は学問の面でも、専門職化の面でも他の誰よりも傑出している。マックス・ウェーバーが死去してほんの数年後に、元々ドイツ・ハイデルベルクで社会学の教育を受けた、パーソンズの経歴は当初はゆっくりした上昇であった。彼は1927年にハーヴァードで経済学の教員となり、1931年にピティリム・ソローキンによって新しく創設された社会学科に移籍した。ソローキンとパーソンズの支配をめぐる引き続く内部闘争のダイナミックスはここでの我々の関心事ではない。パーソンズが彼の偉大な学問上の仕事面での本来の貢献と実践としての社会学は専門職の次元も持つという彼の鋭い自覚の故に、パーソンズが勝利したことを知るだけで十分である。実際専門職の社会学におけるパーソンズの主要な研究領域の中では、医療職と法律職のそれは彼が創設の父と見なされている。

プロフェッションについて書くだけで満足せず、パーソンズは社会学の制度化と専門職化に向けて様々な仕方で具体的な仕事をした。ハーヴァードの有名な社会関係学科を設立しリードするのに彼は活躍した。この学際の実験は1946年から1972年のほぼ30年間続いた。その間彼は合衆国と世界で広く指導的社会学者（特に理論家）として名をはせた。パーソンズの著作の内在的メリットが何であれ、これらのメリットが他の社会学者の間で彼の地位にどの程度責任があるかと、直接にはハーヴァードでの彼の仕事を通じて、間接には彼の名声と学者のコミットメントの共有された価値を通じて、社会学者をプロフェッションに魅了することによって社会学をひとつの学問領域として組み立てるにあたって彼が果たした事実上の影響力は否定しがたいものである。

パーソンズは（社会学者の共同体に関する専門職問題誌）『アメリカン・ソシオロジスト』を創刊することによって、アメリカ社会学の専門職化にも寄与した。パーソンズによって編集された1965-1970の『アメリカン・ソシオロジスト』は、専門職問題についての社会学者の間の自己理解、自己研究のコミュニケーションのためのフォーラムとして広く知覚された（Parsons 1965）。しかしパーソンズの崇高な意思にもかかわらず、社会学というこの専門職はそうはならなかったのである。

2. 社会学の当初の危機

2.1 C.Wright Mills 『社会学的想像力』 (1959)

このポピュラーな本のなかで、ミルズはプライベートなトラブルをパブリックイシューと関連づける能力、簡単な言語でビブリオグラフィーと歴史を架橋する能力以外には社会学的想像力とは何かについてほとんど語っていない。もちろん両考察で、ミルズはパーソンズに敵対している。ミルズはパーソンズの仕事を、抽象的すぎて対立の分析に不十分にしか波長を合わせられない誇大理論として非難している。1950年代の時代は、他の社会学者にも同じような批判的声明を行うことを可能にした。ラルフ・ダーレンドルフの「ユートピアからの脱出 (1958)」, デニス・ロングの「社会化過剰な人間像 (1961)」はそのなかでも著名な試みであった。これらのプログラムの重要な帰結は知的なものだけでなく、社会学的プロフェッションの方向転換を伴うことが意図されていた。権力、不平等、闘争が社会学思想の分析カテゴリーとしてひとたび導入されると、社会学者を変革のアドボケート (提唱者) と想定する活動家の態度は決してはるか背後にはいなかった。ミルズは新しい、ラデカル社会学者のこの役割は、哲学の王、ないし高貴な助言者であるよりも、むしろ王と民衆に同時に顔を向ける者として明示している (Mills 1959: 179-181)。

2.2 Alvin Gouldner 『西洋社会学の迫りくる危機』 (1970)

この非常に影響力を持った本の中で、グールドナーは保守的であると主張することによってパーソンズ流のフレームワークを徹底的に破壊しようとした。一層強く、グールドナーは、客観科学として社会学を展開しようとするいかなる試みもそのごく初期から失敗が宿命づけられているものとみなした。そのため、グールドナーは、パーソンズの世界全体を糾弾するだけでなく、彼の思考に反発して生まれた代替理論 (交換理論, エスノメソドロジー) をも糾弾した。1950年代のミルズと違って、グールドナーは新世代の社会学者、旧来の理論は応じることができない感情を持つ1960年代のヤング・ラデカルズ世代に今や依拠することができた (Gouldner 1970: 7)。換言すれば、グールドナーは社会生活の主観的性質は社会学者によって社会学的認識そのものに適用可能なものとして認識されるべきだと述べた。それゆえ、社会学者は自分たちの態度、感情、感覚を彼らの仕事に変換すべきで、それによって社会を解放し、真にラデカルな社会学を実践することを提唱した。

1950年代、60年代の危機の声明は実質的に社会学の活動家によるラデカル化を引き起こした。60年代世代が時代から離れた1970年代初めは多少ともラデカルなニュー社会学の多くのバリエーションの生まれるのを目撃した。これらの発展の一部は知的で、一部は専門職

のレベルで開花した。

スカラシップの事柄では、1970年代初めから一連のラデカルな社会学的著作が刊行され始めた。ほとんど一夜にして、カール・マルクスが社会学の創設の父の一人になった(Manza/McCarthy 2011)。はっきり批判的傾向を持つ特化した新しい雑誌が創刊され、この分野の主要著作がマルクス主義その他のラデカル思想の影響を受ける一方で、マルクス主義社会学研究が既成の社会学誌にも徐々に掲載されるようになった。

学会レベルでは、ASA に社会学者のラデカル化が起こった。この方向転換には、多様な視点の社会学と多様な背景を持つ社会学の広い受容の要求が伴った。ASA は時折明示的な政治問題、道徳問題にコミットし、従って会員の一部の反対を押し切って行動することを恥ずかしいと思わなかった。二つの出来事が目立つ。1967年に、サンフランシスコの年次大会で、ベトナム戦争反対のデモが組織された(Rhoades 1981)。社会学解放運動は戦争終結を要求する ASA 決議を提案した。しかし学会はフォーマルな方針を採択すべきでないことに会員の多数が投票したときにその決議は敗北した。1968年に決議が再提案されたが、再び敗れた。他の語るべきストーリーは1976年に起こった。ASA 会長 Alfred McLung Lee の指図で、ASA 執行部がシカゴ大学の社会学者 James Coleman を学会から除名しようとした。彼のリサーチで、コールマンはバス通学プログラムによって公立学校から白人が逃げる傾向がみられることを発見した。除名の試みは失敗した。コールマンの名がナチの鍵十字と一緒に掲示された学会年次大会で公開セッションが開催された直後のことであった(Coleman 1989)。

ラデカルな危機社会学者は有利な人口統計学的環境に依拠していた。60年代世代の社会学は、第二次世界大戦後の社会学に存在したオプティミズムによって専攻し、社会学の大学院学位を受ける学生数の増加に寄与したので、サイズの面で目立っていた(Turner/ Turner 1990)。1960年までに ASA は会員 6千名以上で10年前に比べると2倍以上であった。1960年代は、数だけでなく、種類でも、現時点から見ても社会学者のバラエティでも疑いもなく、豊富であった(see e.g. the autobiographies in Sica/ Turner 2005)。

3. 新しい危機とアンチ・クライシス

ニューヨーク・ナイトクラブ・スタジオ 54 の著名なオーナーがかつて「倦怠の時代 dull age」と呼んだ1980年代の10年は、社会学もうまくいかなかった。ポスト1960年代世代の絶頂が過ぎ去り、学生数、社会学会の会員の数も低下していった。1970年代に、ASA は会員を10年前に倍増させ、1,500名になったが、1980年代半ばに1,100名にダウンした。社

社会学のこの急落は1970年代に盛り上がったラディカルな方向の楽観主義を考えると納得のいかない予想外の結果であった。

倦怠の10年の終焉時に高等教育の社会学の存在そのものにとってもっと良くないニュースが到来した。社会学ではきわめて珍しい週刊誌で報じられた出来事であった（Kantrowitz 1992）。もっとも厄介な兆候はイェール大学の社会学科の定員40%削減の計画、ロチェスター大学とワシントン大学セントルイス校の社会学科の事実上の閉鎖であった。上記の出来事はつながりのない出来事なのか、社会学に広く影響を及ぼす趨勢が存在するのか定かでないが、社会学が困難の渦中にあるものと考えられた。それに呼応して社会学の全く新しい危機がアナウンスされた。

3.1 Irving Louis Horowitz 『社会学の腐敗』（1993）

ライト・ミルズの批判的な自伝執筆者（Horowitz 1983）の手になるこの本は、特にマルクス主義者のイデオロギー的傾斜と同時に政策との無関係によって、学問として社会学が衰退にあるという議論を展開している。ホロビッツがいうには、イデオロギーへの寄生で社会学は同時に断片化し、凝集性を欠いている。そのうえ、犯罪と法のような研究分野は新しく開発された研究領域（犯罪学、法と社会）の主題となり、社会学から取り上げられ、結果として社会学専攻の数は大幅に減少してきている。

3.2 Stephen Cole 『社会学の何が間違っているのか』（1994/2001）

元々は1994年に雑誌『社会学フォーラム』の特集号8編として刊行されたが、8つの章を追加して2001年に編著として登場した。この書は社会学のラディカル化と関連した幅広いトラブルに取り組んでいる。著者達は、社会学のイデオロギー的性質を嘆き、関連して社会学理論と調査の様々のありふれたものであるが決して気づかれていない欠陥を指摘する。この書の疑問への解答は、決まって多くは「社会学の問題であり、改善の展望は芳しくない」というものであった。社会学が実際どれだけ間違っているかは、イデオロギー的に墮落した知的に凝集しない社会学の新しい危機という基本的前提を受け入れる者によっては予見できないものであった。古い危機は1960年代の対抗文化世代が社会学をラディカル化したことに依拠しえたのに対して、新しい危機は1980年代社会学の衰退の含意を取り上げねばならなかったからである。

3.3 Michael Burawoy 公共社会学（1999-2004）

社会学の危機の歴史の最後の契機は特定の出版物とともに発生したり結晶化しはしなかつ

だが、アメリカ社会学史上の学会の出来事ともに開始した。1999年にASA編集委員会委員長マイケル・ブラフォイはASRの編集提案がASA理事会によって従われなかった事実に抗議して彼の職位を辞する決心をした。ASA理事会は代わりに学会の旗印のジャーナルを編集する二人の社会学者からなるチームを指名した*。辞任は彼の特権であったが彼はまた自分の決心を他者に伝え、選考プロセスに関する情報を漏らしている。これは学会の守秘義務方針に違反している。

* マイケル・ブラフォイの辞任の手紙とASA会長Alejandro Portesの応答は、*Footnotes* July/August 1999をみよ。

編集委員長の辞任は事態が政治的人種的底流を持つという事実に鑑みて社会学者の間で沢山の注目を集めた。とくに新しい編集者が有色の人物であったこと、その決定が期待され巧妙に仕組まれたものであり、もっと多様な形の社会学を反映するように雑誌の実質的方針変更を伴うものであった。勝機と復讐の機会が舞い降りてきたと感じた彼は辞任のすぐ後、2001年にASAの会長選に立候補した。一年後に当時オースチンのテキサス大学教授であったTeresa Sullivanを破って、当選し2003年に会長に就任した。

ブラフォイは、公共社会学を冠したプログラムの公約を発表した。彼は社会の鏡と良心という社会学の役割の観点から綱領を定義したが、それは世界は多様であり得るという活動家の発想に触発されたものであった*。公共社会学のテーマでブラフォイによって組織された年次大会が2004年サンフランシスコで開催されるまでに、その見方は、通常の左翼活動家の系譜の社会学の大いに政治化された理解にあたる者たちに広い支持を獲得していった。大会は最も明確に政治化されただけでなく、ASAのこれまでの最大の参加者を集めた**。

* ブラフォイの会長立候補の個人的声明。*Footnotes* March 2002をみよ。

** 公共社会学者はサンフランシスコで記録を更新した。*Footnotes* September/October 2004.

公共社会学の正確な性質と問題点はここでの我々の関心事ではない（それについてはDaflem 2004a, 2005）。公共社会学はその当初の導入以来、合衆国においてだけでなく、社会学が行われている世界の多くの国で、熱心に支持されてきていることに触れておくことで十分である。世界規模で公共社会学への関心を巻き込むのに、ブラフォイがASAの会長として公共社会学の利点を講演するために国内世界を旅行する資金を支給されたことが助けとなった。世界中の学術雑誌で2ダース以上のシンポジウムが公共社会学に捧げられた。2010年にブラフォイは、任期4年の国際社会学会会長に就任した。グローバルな成功を考えると、公共社会学は社会学の新時代（社会学が少しも危機感を持たない時代）に先導役を務めていると結論しても間違いではない。社会学のラデカル化は実際に存在するすべての社会学を破

壊したり攻撃することなく異議を唱えられないアプローチとして公共社会学を完全に制度化する地点に達した。私は以下でこの発達の条件と含意を特に大学における社会学のポジションと役割に関して論じたい。

4. アメリカ社会学会と大学での社会学教育

4.1 アメリカ社会学会

社会学の学会組織は現在は量的な意味ではきわめて良好の状態である。2001年の会員数は約13,000人、学会年次大会の参加者も一貫して高い数字を維持している*。私は社会学会のこの成功は、これまでより区別がつかなくなったテーチングとスキルの未熟な社会学者集団とともに生じたと見ている。政治化した社会学者活動家がますます増殖する集団が学会の職位を継ぐので、社会学会への加入が業績から帰属に後戻りさせていると語ることは全くメリットがないわけではない。今日社会学の専門職化は非専門職主義によって可能になっているのである。社会学の旧来の危機は二重の意味で終焉した。つまり社会学者は数が増え増えたものの多くは政治的であるという点で。

* Scelza, J./O. Spalter-Roth/O. Mayorova 2010 A Decade of Change : ASA Membership from 2000-2010. ASA Research Brief.

この新しいラデカルで高度に政治化した社会学の成功は単に社会学を実践している者の政治化の増大の結果ではない。社会学を実践している者の大半は一般にある程度は左寄りであるからである。1990年代初めに社会学の変質と悪しき方向への転換を嘆いた社会学の守護者すら、自身は政治的に大半は左翼であったからである。しかしながらリプセットが指摘するように、この世代の社会学者は彼らの政治活動家志向を彼らの学問活動と明確に区別していた (Lipset 2001)。少なくとも部分的に明確である政治的かその他の道徳的関心事の影響下で研究領域が選ばれたとしても、理論と調査の更なる展開は科学的に営まれていた。

しかし政治的活動家的アジェンダが、彼らの専門職の様々な活動を行う際に、社会学者によってははるかに容易に支持されるようになったために、理論と実践の分析的な分離は今日ではもはや広く受け入れられないものである。ASAの最も奨励され目立つ活動は、その憲章(学会綱領)で学会の目的として謳われている社会の科学的研究や社会学という学問の向上とは無縁である*。代わりに、学会は時代の重要な問題に関係する野心のある政治的活動家的問題にもっと強く志向している。

* ASA 憲章第2条は、「学会の目的は研究、教示、議論の触発と改善ならびに社会の科学的研究に従事する人々の協力関係を鼓舞することにある」と謳っている。

例えば、その組織に関して ASA は多様性声明 (diversity statement) にコミットしている。それは、有色、女性、ゲイ、レズビアン、バイセクシャル、ジェンダーを超越している人、障害者、小さな大学研究施設の社会学者、政府、企業、その他の付属施設で働く社会学者、海外の学者を含めるといふ組織方針をとっている。もっとマイルドに述べると、いかなる学会組織にとっても、任意の特定のカテゴリーを排除することは具合が悪いのである。しかし学会組織があるカテゴリーだけを含める選択をするのはなぜか、他のカテゴリーを排除するのはなぜかは決して明白ではない。多様性声明ははっきり言って、偏っていて時代遅れである。もっと驚くのは、社会学会におけるマイノリティの数は極端に少ない状態が続いていることである。何らかの構造上の障害と文化的な傾性に関係なく有色の学者をリクルートするにはそれはあまり有効ではないので、社会学会のどこかが間違っているのかと尋ねねばならないほど少ないのである。2010年で13,708人の全会員うち、ASAはアフリカ系アメリカ人は6%、ヒスパニック系アメリカ人は4.3%である。対照的に女性の数は急激に増加し、1990年初め以来、女性会員の方が上回っている。院生身分で特に著しい。

その活動家的プログラムでは、ASAは2003年にイラク戦争に反対の決議、2004年に同性婚賛成の決議をしている。学会はさらに幾つかの最高裁判決で、裁判所の友 (amicus curiae) のブリーフをファイルしたことを自慢している。活動主義は学会年次集でも支配している。2011年の「社会紛争」、2012年の「リアル ユートピア」、2013年の「不平等を尋問する」のようなトピックを含んでいる。政治化した社会学は社会学雑誌の頁を埋めている。その内容的な志向よりも方法論的アプローチの点で高度に科学的なブランド作品とそれは共存している。

疑いもなく、ブラフォイによる公共社会学の導入がなかったら、近年の社会学史は別のものになっていただろう。しかしカリフォルニア大学バークレー校のある社会学教授（訳者ブラフォイのこと）でさえ、彼の復讐をうまく実行に移し、社会学学会全体を乗っ取るのに有効な十字軍を開始するのに好都合な環境を必要とした。その点でかつて一度公共社会学の概念がアメリカ社会学に導入されたことがあることを指摘しておくことができる。コロンビア大学の社会学者、ハーバート・ガンズは1988年の学会会長演説で、ブラフォイとは別の意味でそのタームを述べた (Gans 1989)。ガンズ自身が後に認めるところ (Gans 2011) では、彼の努力は社会学に大きな影響を与えることができなかった。ブラフォイがそのタームを使用したとき事態は変化した。その事態をガンズは当初は留保で迎えられたが、次第に無制限の熱狂によって迎えた。ブラフォイが公共社会学の公約で会長選に立候補の声明をしたとき、ガンズはすぐに社会学者にそのタームを導入したのは自分であることを思い出させようとし

た (Gans 2002)。しかしながら 2004 年の ASA 年次集会に続く公共社会学の成功以来、ガンズは自分が提唱していない公共社会学の創設の父としての地位を受け入れてきている (Gans 2011)。2006 年に彼は ASA より「傑出したキャリア学者賞」を授与された。公共社会学の正しい意味をめぐる事件は、公共社会学の複数バージョンで表明された、任意の種類公共社会学に向かう戦略的便宜的動きが起こったので、今では沈静している。公共社会学の理解に基づいて、社会学は今危機を乗り越えているが、それは誰一人もはや同意できないポストモダン条件が到達されたためではなく、全員が公共社会学者の支持者であることが期待されるので、社会学者の間に同意以外の何も存在しないためである。同意しないものはもはや社会学者ではないのである。

どちらの意味でも適切と見なされる公共社会学の暖かい支持と社会学者の大きなグループの中での引き続きの成功を所与とすれば、ジョージ・W・ブッシュ大統領の時期に作り出された文化的雰囲気インパクトによって少なからぬ度合いで旧来の危機の提唱者の復活が可能となることが想定される。だがそれ以上に存在したに違いない。というのは右翼への政治転換がイラク侵攻に続く 2004 年頃からの公共社会学の成功に寄与してきたからである。そして政治的に不和を生じさせる争点がまだ定式化していなかった 1999 年に公共社会学が最初に登場したことにはそれは責任がないからである。

私が言いたいのは、社会学の今日のラデカル化に責任があるのは、今日の社会学者の多くの政治志向ではなく、彼らの学問的剛胆さが相対的に弱いことにあるということである。多くの社会学者は公共社会学という耳障りよく聞こえる見出しの下で、ラデカル化した社会学の落とし穴にはまっているのである。彼らは自分自身の活動を批判的に思考したり、認識論的挑戦を重視したり、一方の理論的視点、方法論的アプローチと他方の様々な社会学的危機への職業組織的問いを区別したり、プロフェッションとスカラシップを区別するのに必要なスキルを持っていないのである。

ASA という社会学職の組織レベルでは、公共社会学の発生は商業モデルへの組織転換、スタッフのマネージャー化、公共性の組織的希求と関連づけることができる。社会学という学問を増進するよりも、ASA は量的観点から学会の成功を喧伝する一方で、印刷物のリリースを発行し、政治的・道徳的問題に関する声明を出してきた。社会学プログラムに記載される学生数、授与された修士博士号の数、ASA 年次集会参加者数の報道がその例である。ウィキペディアの頁では、ASA は世界で最大の社会学者の学会であり、ISA よりも大きいことが描かれている。その声明は 2001 年に学会がウィキペディア・プロジェクトを開始した産物である。それは、ビックリするほど地球文化的感受性に欠け、人口統計学についての簡単な理解に欠ける、市場志向を裏切る意図的自己提示である。さもなければ、合衆国における一

人あたりの社会学者の数は他の西洋諸国より低いことが認識されただろう。

社会学会の商業化は公共社会学登場の数年前からすでに進行していた。その発達は、社会学共同体の学問的に優れたメンバーが専門職ポジションの時間消耗の義務から離れて逃避してきたことと、学会の中心的ポジションにマネージャーが輸入された結果であった。特に指摘しておく価値のあるのは、ASAの理事 (the Executive Officer) はほぼこの20年の間、高度に発達したテクニカルなスキルを持つマネージャーとして知られ、その獲得した社会学の学位が正当化のツールとして役立つ個人の手の中にあったことである。公共社会学の採択は、公共社会学が政策社会学と全く別のものであると自己規定したときでも、公共的事柄部門を設置することによって、社会学をもっと政策的なものにすることを志向していた旧来の公共性の試みに依拠することができた。関連して、ASAは組織のロゴと年次集会のテーマをあしらった様々の販売促進アイテムを売り出した (Deflem 2004b)。

誰にも、少なくとも情報通の社会学者には、社会学会のマネージャー化は大きな驚きを起こさなかった。結局先進資本主義下の大半の組織に当てはまるものが社会学会には当てはまらないと仮定することは学問的な謎であろう。組織された専門職として社会学会は経済的実在でもある。どんなに高尚でも理想的でも、すべての人間の営為は、自らを維持する組織インフラを必要とするというようなことは何も問題ではない。もっと問題を孕むのは、社会学の物質的インフラの指令が社会学の使命に割り込んできて、自分は誰であり何をすべきかを社会学者がどう考えるかを方向付けし直している点である。いずれにせよ、皮肉な結論は、社会学のラデカル化が学会の商業化によって促進されてきていることである。社会学的マルクス主義の成功はアメリカ資本主義の産物である。

4.2 大学での社会学教育

今世紀の変わり目まで続いた社会学の危機とそれ以来の公共社会学による解決はアメリカの大学で教えられている社会学にどのような影響を与えたか。もちろんある程度は事態はそれ以前の通り進んできたし、今後もしばらくの間通常通り進むであろう。講義は教えられ、学位は授与される。しかし重要な変化もある。

社会学会の学問的立場について私が述べてきたことを確認するなら、アメリカの大学で社会学を専攻する学生はGPA (Grade Point Average) によって測定された、GRE (Graduate Record Examination 米国の一般大学院入学適正試験) の結果のようなテストの点数によって測られるトップの成績範疇から補充される傾向はなくなった (D'Antonio 1992)。特にこの数十年スマートな学生は社会学のキャリアを昇ろうという傾向がなくなった。もちろん我々の社会はご承知の通りなので、最も聡明な学生は途方もなくもっと金銭的に報われる展望を

持つ学問に動くであろう。だがそれだけが唯一の理由ではない。職業の報酬構造の階層は今日のそれとは大いに異なっていなかったとしても、戦後の時代は大いに才能のある人々を惹きつけてきた。社会学の戦後の黄金時代は、社会を研究し、社会学という学問によって社会の病根を退治する仕事につくと感じさせる緊急事態から恩恵を受けてきたといわれる。だがいつの時代も自らの切実な社会のニーズと関心を持つので、社会の変化はアカデミックな社会学に他の学問とは異なった、それよりもっと深く恒常的に影響を与えるであろう。国際暴力、経済の停滞のような争点に関する今日の問題はこれまでの数十年に社会が直面してきている問題よりも、社会学にとっては、レリバントがないと信じられている。それゆえ結論は、社会学はもはやその当初の約束を果たし得ないというものである。社会は依然社会学にレリバントであるが、社会学は総じて社会にレリバントであると思われない。問題は社会学教育の供給サイドにあるに違いない。

社会学はそれが耕してきたものしか刈り取れない。社会学が学問的危機にあると思われながら多数の学生を卒業させる豊かさを楽しんだ時代に ill-conceived political learning（まづい構想の政治学習）と貧弱な教育のために、せつかく社会学に魅せられながら、1970年代以後の社会学学生の多くは貧弱な教育を受けた学者（poorly educated professionals）にしかなれなかった。貧弱な教育を受けた学者は上手に教育することは期待されえない。今日の社会学者は研究するために最も重要なものは何か、最も適切な見方、方法論は何かに関して意見が一致していないので、最も必要と彼らが考えるものを教えるのに一貫していない。グッドワークを構成するものについての社会学者間のコンセンサスの欠如は、最も尊敬される学科で仕事をする人々、彼らの仕事が最も注目を浴びる人々が必ずしも聡明ではないことを意味する（Stinchcombe 2001）。

社会学の使命の貧弱な理解の結果として、政治が今や学問に取って代わっている。「予言とデマゴグはアカデミックのプラットホームには属さない」というウェーバーの格言（Weber 1918: 146）は、今日のかんりの数の社会学教授には完全に忘れ去られている。特に公共社会学の信奉者は大学のキャンパスで活動的 sociology 学者を推奨するために多くをしてきている。公共社会学は幾つかの合衆国の大学で専門領域、教える主題となってきた*。結果として、左翼に傾斜する学生は保守系の学生よりも社会学に引き寄せられ、社会学の政治的色彩の一層の同質化に寄与している（Fosse/ Gross 2012）。

* 2004年のあと、幾つかの社会学科は自発的に公共社会学への特別な関心を持つことを自己提示し始めた。ジョージ・メーソン大学、イタカ・カレッジ、フロリダ・アトランテック大学、アメリカン・ユニバーシティ、カリフォルニア大学バークレー校（Deflem 2005）。オンライン検索では、公共社会学アジェンダを明確に支持している学科の数は近年数倍に増加し、今や、ミズウリ州立大学、シラキュース大学、セントルイス大学、ノースカロライナ大学ウィルミントン校、サレム州立大学、フンボルト州立

大学、ペーカー大学その他が含まれる (Google 検索 2012 年 10 月 30 日)。

社会学のラデカル化の影響はキャンパスで最も感じられる。公共社会学が実際に特にメディアの主流に何とか取り入る少ない機会では、その影響は甚大である。それは一般誌にも登場するので、最も当たり障りのないくだらない話 (the blandest dribble) は公共社会学の立派な行い (grand act) として提示される。Jeffrey Alexander のような理論社会学者を自認するものさえ、最近 *Huffington Post* に登場したので自己の著述を公共社会学として述べている (Yale Sociology website)。この論文は、彼のゼスチャーが雄弁ではないという演技の失敗の故に、バラク・オバマがミット・ロムニーとの最初の大統領選討論に負けたと述べている (Alexander 2012)。この論文がオンラインに載せられた一ヶ月あまりで、11 のフェースブックシェアと 25 のツイッターポストを受け取った。

専門職者の政治化したポピュリストと違って、科学の基準に基づいた学識に依然コミットしている社会学者は一般大衆や潜在的学生にはよく知られることはない。なぜなら、彼らの作品の比較的高い度合いの真面目さが障害と見なされるだろうから。ポピュラーなテーマが学者の視点から教えられるときでも、それはゆがんだコンテキストのもやのかかった霧 (the hazy mist of a perverted context) を通じて知覚されるだろう。法社会学の領域で最も仕事をする者として、私は高度に社会とレリバンスを持つトピック (犯罪、警察、テロリズム) をクラスで教える負の意味を検証することができるが、現在のアカデミックなコンテキストでは、それは容易に誤解される。私は「レディ」と「ガガ」の語を含む社会学講義を教えたとき、この問題をもっと鮮明に自覚した*。

* サウス・カロライナ大学で「レディ・ガガと名声の社会学」の私の講義が 2010 年 10 月末に初めてアナウンスされたとき、それは世界で一番のレディ・ガガニュースになった。インターネット、印刷物、ラジオ、テレビ上に数千の報道とコメントが寄せられた。一般の人びとの社会学認識の嘆かわしい証拠で皮肉なことだが、名声 fame と知名度 celebrity の社会とのつながりを確認するなら、講義の目的は、センセーショナルで催し好きなメディアによってだけでなく、保守主義アウトレットによっても誤解された。後者では、講義が高等教育の非学問的トレンドの一部と誤解された (e.g. Allen 2011)。組織された社会学では状況は一層厄介である。ASA ニュースレターであるフットノートはこの講義について二度も取り上げた。私がもはや学会の会員でもない、掲載許可を私が与えなかった事実にも拘わらず、3 つの報道メディアだけを参照しながら。公共社会学者は自分たちのものでないものにまでクレームをつけている (Defleme 2012)。

科学の精神を持った社会学者は政治化した、一流ではない同僚との骨の折れるバトルに直面している。科学社会学者ステフェン・コールが指摘しているように、多くの社会学者はイデオロギー的であるだけでなく、イデオロギー的でありすぎるので、社会学は一人残らず、必然的に左翼であるという考えの普及に寄与している (Cole 2001b)。まれでなく、学生

達の間には、社会学は科学でなく、しばしば社会主義と混同されることがある*。教えるにあたって自分を政治信条にコミットしているものと見なす社会学者は、それを決して認めたいと思わないだろう。公共社会学が10年前に開始したとき、マイケル・ブラフォイは教えることを中心性と我々の最初のパブリックとしての学生のレリバンスを強調した（Brawoy 2002）。

* ASR 掲載のある論文（Volschoa/Kelly 2012）が最近ブログ上で、社会学者が共和党員をアメリカにとって悪であると言明したと受け取られた（Science Codex 2012）。もっと興味深いものとして、コメント欄で、誰かが「人類学者はそのような著作を書くべきではないとくに国政選挙の直前には」と意見を述べた。それに対して別のコメントーターが「彼らが人類学者なら、それは90%非科学的だろう。これは社会学者と政治学者であったが故に、これはそのかわり100%の脚色であった」と注釈した。

社会学の政治化した性質は大学管理者、政策形成者、一般大衆に社会学の信用を疑うように導いた。そのような知覚の真に悲惨な側面は、社会学が必然的に左翼である、一部の社会学者が明らかに左翼の傾向を持っていないことは真実ではないということではない、ましてや一部の社会学者はまだ何とかして彼らのポリテックスを教室から排除しようとしているということではない。むしろ、社会学にとって最も厄介なのは、多くの社会学者の学問的無能が認識されず、ポリテックスの事柄と知覚されていることである。政治的無駄と戦うことに基づくよりも、むしろベターな議論の勢力を引き出すことを拒絶するなら、科学は前進できない。

社会学者にとって、政治的であり、教えるときにそれに従って行為することと、この態度が高等教育の場で持続し栄えるかどうか、それはなぜかを黙考することは全く別なことである。ある学科の閉鎖の議論を知れば、ある程度社会学はそのポリテックスをめぐる渦中におかれてきている。しかしながら、1990年代初めに閉鎖にあった少数の学科より社会学の大きな規模での政治化を考慮すれば、社会学教育の政治化がごく最近、目立って増大してきているのを考慮すれば、アメリカの高等教育の場でかくも多くの社会学科が今日まだ存在し、何も少しも変わらないかのように稼働しているのはもっと注目を引く事柄である。

大学の管理者、特に学部長は、社会学科とその教員にかなり低い評価を抱えていることが時おり語られる（Lipset 2001）。ある最近の研究は、「学部長が社会学教授を、アカデミックな厳格さを維持、院生を惹きつけることの成功、グラント獲得や、レフリー制雑誌の掲載能力、キャンパスでの全般的威信のような幾つかの領域に基づいて芳しくない等級付けをしていること」が語られている（Hohm 2008）。社会学科は左翼と活動家に傾斜した学生を惹きつけ、実質的問題、方法論問題に一貫性と同意を欠き、反合理主義の潮流を支持しているという理由で、学部長は社会学科に比較的否定的な見解を持っていることが語られている

(Huber 2001)。

学部長が述べていることは彼らが考え、行っていることと必ずしも一致しない。もし社会学の問題点が非常に明白ではっきり認識されているなら、重要な疑問は、社会学科が存在することを許されているのはなぜかである。この点で社会学教育の政治化を支えているのは、想定されている高等教育の政治的性質ではなく、高等教育の商業化である。前者の議論はポピュラーなものだし、メディアや一般大衆の間でしばしば叫ばれている。大学はリベラルを育てている、大学は学生を世俗化させている。しかしこの考えは、記述的には正確でないし、高等教育の発達を説明することができない。むしろ、社会学教育の政治化は社会学科が果たすことができる経済的機能の故に存在し続けているのである。

今日の大学は入学の基準を下げ、彼らの準備の水準に関係なく以前より多くの学生を受け入れている。例えば、私が目下勤務しているサウス・カロライナ大学では、学部生の数は2006年の18,000から2011年の22,000に上昇している。純粹に教育的事柄として、相対的に低い知的スキルにも拘わらず、教えられねばならない学生の量は、教員に抵抗をもろともせず基準を保つようにというかなり顕著な圧力をかける。上記の状況下で働く最良の教師でさえ、学生に合わせてトラブルを避けるためにアカデミックな基準を維持することは容易いことではない(Becker/Rau 2001)。差別表現をしない(political correctness)は、排除の政治に荷担する政治的行為を意味するものとして受け取られることをもたらしてきている。最も悲劇なのは、大学の管理者から学科に登録者を維持せよという圧力が行使されている。低いスキル水準の学生は入学させられるだけでなく、卒業しなければならない。学士号を手に入れることは正義の事柄となり、獲得した学士号そのものが模造品(mockery)となつてきている。高等教育に帰せられている統合機能と学生の多様性を高めるニーズはさらに皮肉な帰結をもたらしている。

包括的な研究『アカデミック世界を漂流して(2011)』のなかで、社会学者 Richard Arum/Josipia Roksa は「今日の大学に学生の二重構造が存在する」ことを明らかにした。大きなまた比率が伸びている学生群は、十分な推論と書くスキルを欠いている。目的が定まらず欠けているので、彼らは単位の取りやすい授業をとり、できるだけ学習に少ない時間を割いている。教授と院生のティーチング・アシスタントは取れていない単位を与えるように圧力をかけられている。典型的には、特権的背景と良質の高校出身者はまだ学問への挑戦意欲があり、在学中有意義に学んでいる。大学の管理者は上記の問題を十分自覚しているが、彼らの管理者の思考が問題を処理するより状況に合わせるように導いている。

高等教育組織に影響を与える社会の変化は様々な学問に異なった作用をしている。工業化学科、細胞生物学科は高等教育に必須の知的能力を欠く沢山の補欠入学者を歓迎せねばなら

ない。しかし上記に比べると試練を受けていない社会学，他の社会科学，行動科学，人文学はもっと反対の影響を受け，できの最悪の学生を受け入れねばならない。皮肉なことに，益々多くの社会学者がこの課題をかなりうまくこなしている。かつて社会学者は，社会学は最も知性の低い学生を惹きつけるので，自分たちの学科は予算削減に弱く，大学管理者の尊敬を失うことを恐れていた（Becker/ Rau 2001）。今日では管理者は同じ理由から社会学を暖かく抱きしめているので，正反対のことが真実である。社会学は経済的機能を果たすために存在し続けることが許されている。大学の管理者はビジネスとして大学を形成し直し，天職として教えるという理想を放棄している。再び目下私が勤務する大学を例にすると，サウス・カロライナ大学は2012年に学生と大学の勤務者が「ブランドを生かせ」と鼓舞される，マーケティングとブランド化を統合したキャンペーンを開始した（USC Times 2012）。起業家的大学（Etzkowitz et al. 2000）のそのような状況下で，それは特定の政治・倫理の指図でなくモラルティの欠如であり，社会学がそのラディカル化した政治化した形態で進むことができることに貢献してきた道徳的指針の欠如である。

5. 社会学とポリテックス

社会学は歴史的に様々なサイクルを潜り抜けてきている。今日安定の新たな時代が先導されているので，危機のサイクルは終焉している。キャンパスでの社会学の目下の成功は経済変化が社会学の発展と交流する仕方の結果であることを明らかにしてきた。社会学にとって外部社会の変化（特に財政危機）は大学の管理者をビジネス・モデルに迎合させ，大学のアカデミックな使命を撤回し，健全な財政姿勢を続ける名の下に個人の責任を避ける無責任な経済選択を取らせていることを明らかにした。この文化的に弱い反応は，重く政治化した社会学が学問に挑戦的でなくより民衆に媚びるものであるがゆえに，大学の中で存続し続けることを可能にした。社会学の政治化そのものは，社会学のアンチ・クライシス以降の社会学の方向の観点から，彼らの学者，教育者としての正しい役割を理解せず，彼らのポリテックスがスカラシップに取って代わらせることよりバターなことを知らない，実務者の貧弱な知性発達の結果である。政治化した社会学は志向において圧倒的に左翼であるという事実は，知性の欠如ないしは低度の知性主義にそのより深い原因がある様相に他ならない。

外部社会の変化と社会学内部の力学は，大学がビジネス・モデルに賛成して道徳的使命を放棄した高等教育の制度水準で出会ってきた。一世紀以前に，ウェーバーは「彼の目にした教師のアメリカ的概念は次の者であると述べている。八百屋が私の母にキャベツを売るように，教師は私の父の金と引き替えに，彼の知識とメソッドを売っている（Weber 1918:

149)」。今日高等教育の管理者は自分のところの教師達に同じ態度を取ることを求め、自分を八百屋、学生を顧客と見なしている。今日の社会学では、従っているものが多い。

今日社会学の多くは、あまりに政治的であるので良き学生を惹きつけることができず、入学してくる者に適切に教えることができる知性が備わっていない。どんなことがなされているか。社会学という学問の内部では、新たな危機に乗り出し、科学としての社会学の理想を強化し、計量の代わりに定性に重きを置き、社会学をアンポピュラーにし、社会学の当初の約束を再スタートさせることである。社会学者は明確な科学的基準に基づいて自分の仕事においてもっと厳格になるべきである。学生に対しては、この態度は理論と調査のための正確な基準を定め、政治的考慮、人間的考慮に基づいてよりもむしろ上記の基準に従って成果を判定すべきである (Cole 2001b)。対外的には、経済的圧力に直面して、変化が起こる必要がある。上記の問題は構造的なものであるがゆえに、この任務は容易くはない。しかし教育の道徳的機能の更新に向けて力を合わせて働くことが必要である。

文献一覧

- Alexander, J. 2012 “Obama’s Downcast Eyes.” *The Huffington Post*, October 4, 2012.
- Allen, C. 2011 “Lady Gaga Makes It to Harvard.” *Minding the Campus*, November 18, 2011.
- Arum, R./J. Roksa 2011 *Academically Adrift: Limited Learning on College Campuses*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- ASA 1999 “Public Forum (includes resignation letter by Michael Burawoy, and response by Alejandro Portes, ASA President).” *Footnotes*. July/August 1999.
- ASA 2004 “Public Sociologists Broke Records in San Francisco.” *Footnotes*. September/October 2004.
- ASA 2009 “Report of the American Sociological Association’s Committee on the Status of Women in Sociology.”
- Becker, H.S./W.C. Rau 2001 “Sociology in the 1990s.” In S. Cole (ed.) *What’s Wrong with Sociology*. pp. 121-129. New Brunswick: Transaction Publishers.
- Burawoy, M. 2002 “Personal Statement (for candidacy as President-Elect).” *Footnotes*. March 2002.
- Cole, S. (eds) 2001 *What’s Wrong with Sociology*. New Brunswick: Transaction Publishers.
- 2001 “Introduction: The Social Construction of Sociology.” In S. Cole (ed.) *What’s Wrong with Sociology*. pp. 7-36. New Brunswick: Transaction Publishers.
- Coleman, J.S. 1989 “Response to the Sociology of Education Award.” *Academic Questions*. 2 (3): 76-78.
- D’Antonio, W.V. 1992 “Recruiting Sociologists in a Time of Changing Opportunities.” In T. Halliday/M. Janowitz (eds.) *Sociology and Its Publics*. pp. 99-136. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Dahrendorf, R. 1958 “Out of Utopia: Toward a Reorientation of Sociological Analysis.” *American Journal of Sociology*. 64(2): 115-127.
- Deflem, M. 2004a “The War in Iraq and the Peace of San Francisco: Breaking the Code of Public Sociology.” *Peace, War & Social Conflict*. Newsletter of the ASA section. November 2004.

- pp. 3-5.
- 2004b “Large Mug, Mousepad, Infant Creeper, Bib, Dog T-Shirt : The Professional Group Revisited.” *Perspectives*. the ASA Theory Section Newsletter. 27(4) : 15.
- 2005 “Public Sociology, Hot Dogs, Apple Pie, and Chevroret.” *The Journal of Professional and Public Sociology*. 1(1) : Article 4. →後掲
- 2012 “The Presentation of Fame in Everyday Life : The Case of Laday Gaga.” *Margin*. 1 (Spring) : 58-68.
- Etzkowitz, H/A. Webster/C. Gebhart/B.R.C. Terra** 2000 “The Future of the University and the University of the Future : Evolution of Ivory Tower to Entrepreneurial Paradigm..” *Research Policy*. 29 (2) : 313-330.
- Fosse, E./N. Gross** 2012 “Why Are Professors Liberal ?” *Theory & Society*. 41 : 127-168.
- Foucault, M.** (1975) 1977 *Discipline and Punish*. New York : Vintage Books.
- Gans, H.J.** 1989 “Sociology in America : The Discipline and the Public. American Sociological Association, 1988 Presidential Address.” *American Sociological Review*. 54(1) : 1-16.
- 2002 “Most of Us Should Become Public Sociologists.” *Footnotes*, July/August 2002.
- 2011 “How to be a Public Intellectual : An Interview with Herbert Gans.” *The Public Intellectual* May 31, 2011.
- Gouldner, A.W.** 1970 *The Coming Crisis of Western Sociology*. New York : Basic Books.
- Hohn, C.F.** 2008 “Sociology in the Academy : How the Discipline is Viewed by Deans.” *Sociological Perspectives*. 51(2) : 235-258.
- Horowitz, I.L.** 1983 *C.Wright Mills : An American Utopian*. New York : The Free Press.
- 1993 *The Decomposition of Sociology*. New York : Oxford University Press.
- Huber, J.** 2001 “Institutional Perspectives on Sociology.” In S. Cole (ed.) *What's Wrong with Sociology*. pp. 293-318. New Brunswick : Transaction Publishers.
- Kantrowitz, B.** 1992 “Sociology’s Lonely Crowd.” *Newsweek*, February 2, 1992.
- Lemert, C.** (1995) 2004 *Sociology After the Crisis*. Boulder, CO : Paradigm.
- Lipset, S.M.** 2001 “The State of American Sociology.” In S. Cole (ed.) *What's Wrong with Sociology*. pp. 247-270. New Brunswick : Transaction Publishers.
- Manza, J./M.A. McCarthy** 2011 “The Neo-Marxist Legacy in American Sociology.” *Annual Review of Sociology*. 37 : 155-183.
- Mills, C.W.** 1959 *The Sociological Imagination*. New York : Oxford Univ. Press.
- Parsons, T.** 1965 “The American Sociologist : Editorial Statement.” *The American Sociologist*. 1 (1) : 2-3.
- Rhoades, L.J.** 1981 *A History of the American Sociological Association, 1905-1980*.
- Rosich, K.J.** 2005 *A History of the American Sociological Association, 1981-2004*.
- Scelza, J./R. Spalter-Roth/O. Mayorova** 2010 “A Decade of Change : ASA Membership from 2000-2010.” *ASA Research Brief*.
- Science Codex.** 2012 “Sociologist Declares Republications Bad for America.” *World*. October 1, 2012.
- Sica, A./S. Turner** (eds.) 2005 *The Disobedient Generation : Social Theorists in the Sixties*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Stimchcombe, A.L.** 2001 “Disintegrated Discipline and the Future of Sociology.” In S. Cole (ed.) *What's Wrong with Sociology*. pp. 285-97. New Brunswick : Transaction Publishers.
- Turner, S.P./J.H. Turner** 1990 *The Impossible Science : An Institutional Analysis of American Sociology*. Newbury Park : Sage.
- USC Times** 2012 “As Gamecocks, Our Stories Have No Limits.” *USC Times*. Fall/Winter 2012.
- Volschoa, T.W./N.J. Kelly** 2012 “The Rise of the Super-Rich : Power Resources, Taxes, Financial Markets, and the Dynamics of the Top 1 Percent, 1949-2008.” *American Sociological Review*.

77(5) : 679-699.

Weber, M. (1904) 1949 “Objectivity in the Social Science and Social Policy.” In E. Shils/H. Finch (eds.) *The Methodology of Social Sciences*. pp. 49-112. Glencoe, IL : The Free Press.

——— (1918) 1958 “Science as a Vocation.” In H.H. Gerth/C.W. Mills (eds) *From Max Weber : Essay in Sociology*. pp. 129-156. New York : Oxford Univ. Press.

Wikipedia. “American Sociological Association.”

Wrong, D.H. “The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology.” *American Sociological Review*. 16(2) : 183-193.

付 公共社会学とホットドッグとアップルパイとシャーベット

【梗概】 公共社会学は公共的でもないし社会学でもない。公共社会学は認識論を持たないし持つことも出来ない。公共社会学のためにそして公共社会学に向かっていうならば、何ら公衆を持たない。公共社会学には何ら論争が存在しない。代わりに公共社会学は社会学者の間に宣伝することに成功を収め、広く支持を集めてきている。公共社会学は消費者を持っている。公共社会学は社会科学のファーストフードである。公共社会学の影響は様々な仕方で制度化されてきているので、目立つし実在する。私は公共社会学の制度化の条件を分析し、その力学と帰結を批判的に評価する。

序論：公共社会学に触れるのはこれが最後

これは私の最初のものではないものの、望むらくはこれを公共社会学に触れる最後の論文であれと望んでいる。なぜならまだ起こっていない論争をこの論文が煽ることになると認めねばならないから。書く理由が残されるだろうから、私のこの希望は愚かである。おそらく私のサイドには時間がないだろうが。この論文を書く機会は2度目であるので、応答が誰かによって後続することが、掲載に先駆けて編集陣で決められていた。この論文をたまたま目にした一般読者以外の誰に向かって自分が語っているのかを知らないで、これはちょっと異例である。しかし少なくとも公共社会学においては何らかの一貫性があるのだろう。

この論文を書く機会は公共社会学の代表者の依頼に基づいて私が書く初めてのものである。典型的には公共社会学者は彼らが説教することを行わないし、彼らの活動を内輪に留めておくことを常としているからこれは驚きである。これはASAに公共社会学部会を設ける作業グループの設置に見るように、彼らは選挙よりも任命によって統治しているから。例えばマイケル・ブラフォイがASAの会長に立候補して選出されたときのように、彼らの権力が名目的部会に由来するものの、時には、彼らもポピュラーな正当性を主張する。公共社会

学とその勇ましいリーダーの登場は流星のごときのものでなく論理的なものであった。というのはそれは ASA 執行部（組織に対する強い官僚的支配を持ち、我々の専門職団体を商業化と一般への周知に移行させた）の全面支持を受けていたから。公共社会学の前進を支援するそのような大きな力があれば、他に何を望むというのか。それに批判的な社会学者がもっと声を発し、もっとうまく組織されることがどうしてできよう。そのような力にはどんな公衆も反抗できない。

公共社会学者の間では反抗は許容されないし受け入れられない。対話は公共社会学者にとって中心的でないばかりでなく、全く不在である。人目に付かないわけではないが、この主題についての私の寄稿を承認したのはこれまでなかったことである。2004年のサンフランシスコでの ASA 集会で、ある公共社会学者が「デフレムを重視する者は一人もいない」と述べた。多くの公共社会学者にとっては、この言明はおそらく真実であろう。何ら幻想も後悔も含まれないであろう。というのは、公共社会学者の間では、取る戦術は敵対者を病理扱いし同時に自分たちを理想化することであるから。おそらく私のマージナリティは、公共社会学者が議論に参加することを拒絶する以上に冒涇することにある。しかし公共社会学者が拒絶された論争に参加する機会がこれまで存在したことも否定できない。報復を恐れるあまり公共社会学に公に異議を唱えることを恐れる ASA のメンバーと仲間の社会学者（特に院生）が私に接触してきたと書いたとき（Deflem 2004c）、公共社会学の家長はサルトルとハバーマスが反動的と呼んだやり方で反応してきた（Burawoy 2004a）。彼は沈黙したままであった。サンフランシスコでの ASA 集会では異議の声で許容されたものはひとつもなかった。いずれにせよ、出版の形であれ、オンラインであれ公共社会学に関する私の寄稿は学問のアウトカーストへの急行に乗せるのをスピードアップさせたことであろう。私が受けた烙印は「科学的イデオログ」「怪物」であった。

私は公共社会学に対して批判的ではあるが、公共社会学の批判者ではない。私は法と社会統制研究を専門とする一社会学者である。公共社会学の言説に存在する合法性、正当性、統制に問題があるものの、それについて書くのは私の主要な動機ではない。社会学は私の職業ではあるが私は本格的な社会学者（プロの社会学者）ではない。私はその装いがどんなにフレンドリーであっても左翼のファシスト体制によって押しつけられる真面目と一貫性の欠如を受け入れることはできないので、公共社会学と専門社会学の区分を受け入れることはできない。一社会学者として私はベターな議論の力だけを甘受する。

公共社会学を党派社会学の婉曲表現であることを見落とす専門社会学者は一人もいない。なぜなら公共社会学に批判的である社会学者は社会学者にかわりないからである。シカゴからバークレーへの移動というこの独特の結果を説明するにはかなりの量の同情が要求され

る。公共社会学の登場は特に私を立腹させはしない。リチャード・ニクソンは、びっくりする一瞬の聡明と明晰をもって「人は尊敬する誰かに対してだけ馬鹿になる」と語っている。

本稿では、公共社会学の制度化、公共社会学がどのようにして受け入れられ、支持され広く熱心に消費されるようになったかに触れるつもりである。確かに我々の文化の中身の欠如は賢いマーケティング・キャンペーンによって広い消費に導くが、そのようなトリックに惑わされない用意のあるプロフェッションの間で商業化が成功したのを観察することは依然驚きである。公共社会学の制度化は依然謎である。私はまず以前の著述で公共社会学に私が浴びせた批判のいくつかを簡単に再把握するつもりである (Deflem 2005a,b,c, 2004a,b,c)。

1. 公共社会学は公共的でもないし社会学でもない

2003-04 年度 ASA 会長マイケル・ブラフォイによれば、公共社会学は階級不平等、人種不平等、新しいジェンダー体制、環境の悪化、多文化主義、技術革命、市場原理主義、国家、非国家暴力をめぐる公共論争を定義し、促進し、精通させる (ASA 2004)。さらに公共社会学は何であるかと何になりうるかのギャップを暴露しながら、我々の知っている世界に挑戦する (Ibid)。換言すれば、公共社会学は二重の制限を課す。第一に、公共社会学は一定分野のリサーチに限定される。第二に、公共社会学は社会的世界の構造と過程の分析に志向せず、そのかわり何になりうるかという想像された非実在の世界によって世界に挑戦しようとするものである。

公共社会学は断片化され常道を外れた社会学である。社会学はひとつの社会科学であって、定義により社会生活に関する科学的認識以外のものの促進と定義には関わらない。社会学的認識は方法論と理論の事柄では基準を遵守し、経験的調査からの洞察を確認したり、反証する。社会学は任意の特定の問題に限る必要はない。社会学的認識は世界に挑戦することはできない。我々はそのような重要な任務のために哲学と道徳を持っている。

公共社会学とそれが導入する区分は社会学を他の倫理・政治的構想に社会学を包摂する戦略的プランの一部である。社会学はつねに公共的である。公共社会学というタームは公共的でない社会学が存在しうることを想定している。それではなぜそのタームが導入されたのか。公共社会学のラベルは実践しているもの自身が「社会学的マルクス主義 (Burawoy/Wright 2000)」というある特定のバージョンに薄いベールをかぶせるために盗用されたものである。あるマルキスト・クラブ内部で公共社会学者も多くを容認する。ASA マルキスト社会学部会ニュースレター、雑誌『批判的 sociology』では、マイケル・ブラフォイはあからさまに、自慢げに左翼政治を社会学に持ち込んだ自分の偉業を自慢している (Burawoy 2003, 2005a)。

前者のニューズレターで、ブラフォイはASAは人種に関する政治論争に果敢に挑み、3分の2の多数決で通過させたイラク戦争反対決議で政治に突き進んだと叫んでいる。ラデカルな社会科学雑誌「批判的社会学」のなかで、彼は公共社会学を民主的社会主义のビジョンに責任を持つ、社会学的社会主义プロジェクトの中核部分であると情熱的に書いている (Burawoy 2005a: 325)。もっと広くには、公共社会学タームの占有に働いているのはシンボリックな力を獲得するための戦術的手である。社会学の現状に関する洞察ある分析の中で、ジェームズ・ムーディは「公共社会学タームは、学問の中の下位領域を定義する広く知られたやり方に依拠することによって社会学的実践の意味をこっそり変えている」と述べている (Moody 2005)。「タームがいったん流通すると、定義の詳細は大体無関係である。個別を埋めることによってでなく、タームを設定することで力が得られるのである」。

ごく最近になって、社会学的プロフェッション以外の公衆と何らかの関係のある活動が公共社会学を指すようになり、公共社会学というタームが「複数形」になったことである。これらの活動は政治的活動主義、メディアのインタビュー、テーチングという多様な事柄を含む。この戦術は「学界の外で仕事をする社会学者は公共社会学に批判的となり得ない」という誤認を蔓延させた。公共的知識人としての社会学者の役割を愛好し、実践している公共社会学の敵対者がいるという事実は皮肉である。

その隠れているが実在するアジェンダを所与とすれば、公共社会学は複数の見解が参加できる議論のフォーラムではない。その代わりそれは任意の認識論を欠いたある個別主義的な政治的立場である。公共社会学は他者との議論を一切許さない。公共社会学はそれ自身によってを除いて語られたり聞かれることはない。公共社会学は公衆を一切持たない。それは自分勝手に話す。公共社会学はそれでない何かのために宣伝することに成功している限り、公共社会学はアカデミックな学問としての社会学の公的な立場を侵害している。公共社会学はある程度のポピュラリティを享受しているが、そのポピュラリティは議論に基づくものではなく、社会学者に想定される目的と活動についての流布した概念に基づいている。公共社会学はコココーラとペプシの間での選択である。

社会学という学問は政争の具となってきた。公共社会学はひとつの帰結に他ならない。プロフェッションは監督を受けるようになってきた。公共社会学はひとつの帰結に他ならない。ブラフォイの語るには、公共社会学は社会学の正当性を脅かさない。反対に、power that beは今まで以上に社会学と社会学者について考えられることは少なくない。いわゆる power that beにとって、社会学は実際には死んでいる。人はこの悲しい事態のために公共社会学の登場を責めることはできないし、集団としての我々の構造的弱さが責められるものとは考えることはできない。その代わり個別の学者としての我々のそれぞれの知的欠陥は公共言説

における我々が相対的にレリバンスを欠如するのに寄与している。しかし、少なくとも公共社会学に反対するものは社会学者が自らの社会に正当に寄与しているしできる。それに対して個別主義的批判者として公共社会学者は自分を除くいかなるものにも耳を貸さないうで、レリバントな社会学、アカデミックな学問として社会学に対する固いコミットメントを要求する。社会に関して絶対的に分析的である勇氣は社会学の真の革命的性質である。根本主義の盲目的暗さを超越することができないために、公共社会学は最善でも退屈、最悪では保守的である。社会は公共社会学よりもましである。

2. 公共社会学の制度化

公共社会学登場の種子は ASR の編集委員任命をめぐる論争 (SSSTalk 1999) よりおそらくずっと以前に撒かれていたであろう。しかし公共社会学の制度化へのはっきりとした転換は、ASA で「境界なき社会学者と政治学者 (現 境界なき社会学者)」グループのメンバーによって決議が提起された 2003 年春に取られた。その決議は「ASA はイラクに対する戦争の即時停止」を要求すべきことを定めていた (ASA 2003)。ASA 理事会はメンバーのその戦争に対する個人的立場に関するオピニオン・クエスチョンを付帯して、学会会員に決議に向かうことを決めた。投票した会員の多数はその決議に賛成したので、イラク戦争が終結されるべきというのが ASA の公式の姿勢となった。この決議は疑似社会学的争点としてイラク戦争のモラリティを提示しただけでなく、ASA の政争化が通常化されることと類似した道徳的事柄、政治的事柄に関する更なる決議が取り込まれる下地を引き起こした。この決議は公共社会学制度化の最も明確な始まりを記した。

一年経て、2004 年 3 月 26 日に、同性婚を禁止する合衆国憲法修正の大統領提案に対する決議が ASA 理事会に提出された。決議は ASA に結婚を男性と女性の間と定義する憲法修正提案に反対することを要求した。4 月 7 日に、ASA 理事会は会員提案と ASA が定義する、決議を決する会議を招集した。

しばらくの間、ASA 理事とその会長の活動は彼らの正体を晒した。決議は ASA メンバーによって発議されず、当時の会長ブラフォイの politics-over-procedure (手続きより政治力を使った) 手法の結果であった。彼は既に ASA 編集委員長だったときに前科があった。その事柄が既に ASA 理事会で議論された後に ASA のある部会に彼は決議の考えを初めて提案したのであった (Deflem 2004c)。

イラク戦争に対する決議同様、2004 年の婚姻に関する決議、もっと一般的には ASA における倫理的・政治的趣旨は社会学という学問とプロフェッションにとって障害となった。問

題になったのは、我々がある権利、憲法条項が気に入る、気に入らないではなく、そのような事柄の決議を ASA で通過させるのかどうかであった。ASA とプロフェッショナル一般は彼らが意図していなかったものになる危機に瀕した。そのほかに、ASA の決議は社会には役立たなかった。これを読むことは公共社会学者にとってショックであろう。2004 年の ASA の集会で私がそれを言ったのを聞いた彼らにとってショックであったように。しかし ASA の戦争反対決議はイラクで進行している無感覚な殺戮からたったひとりの生命すら救わなかった。それは公共社会学者に自己満足させただけであった。あなたがたはそれを自慢したのか。

社会学者の中には、無関係であるという代替肢（アカデミックスに絶えずある危険）は我々のプロフェッションにおいて政治活動家であることでもなければ、特定の種類の活動だけを認めることでもない。活動的社会学主義、単一の活動主義の代わりに、広範囲の社会学的活動主義の促進だけが社会学的洞察を我々の社会を動かすより広汎な問いに有効に結びつけるものであった。我々の政治闘争、道徳闘争においては、複数の選択肢が存在する。しかし社会学会を政争化させることに熱心な ASA 指導層と社会学を政争化させることに熱心な公共社会学者は真理が露出するのを欲しなかった。彼ら自身の申告によって、かれらは真理に配慮しなかった（Burawoy 2004b）。

マイケル・ブラフォイが ASA 会長に就任している間、公共社会学の導入以上にショックだったのは、公共社会学のアイデアがそれ以来易々と支持されたことと、公共社会学が制度化された度合いであった。確かに社会学の大学院教育の思想なき繁殖も寄与要因のひとつであった。今日社会学者は（正しいことに反対する）はるかに左よりというよりむしろ、（間違ったことに反対する）やや右よりであるために、ASA 決議が通過した事実に注目。また公共社会学を支持して靡いている歩兵の大半は、彼らの仕事が我々の学問にとって中心的でないので、我々のプロフェッションにとっても中心的でない。一層重要なことは、公共社会学は、ASA 理事の努力のおかげで、近年起こっているプロフェッションの管理化と学問の商業化の恩恵を受けてきていることである。

公共社会学の制度化と影響力は目立つし本当である。一部の社会学者が自分の関心、専門領域として公共社会学にはっきり言及し、一部の学科は彼らのテーチング・プログラム、リサーチ・プログラムで公共社会学にルーチン的にコミットしていることをアナウンスしている。バークレーの社会学科は目下「公共社会学の中心的拠点」と宣伝している（Voss 2005）。その学科が公共社会学の自称スターを抱えているので、その記述は全く驚かない。バークレーは一連の公共社会学トークを組織し、公共社会学の促進に多大な時間とエネルギーをつぎ込んでいように思われる。バークレーの自画像で注目すべきは、バークレーよ

りもアメリカの公衆から社会学がさらに離れることを想像することが困難な点である。しかしおそらくケチャップはキャベツである。

バークレーのほかにも、単に公共社会学者を数人抱えているだけでなく、公共社会学を推進することにはっきり打ち込んでいることを喧伝する他の学科もいくつかある。ミネソタ大学の社会学は公共社会学の賞を設置した (Aminzade 2004)。一部の学科は彼らのジョブ宣伝で公共社会学に向かうことをアナウンスした。ジョージ・メイソン大学は最近社会学が公共社会学の側面を發展させることに邁進する拡張ユニットに向けて働くことを宣言してひとつのジョブを設置した。

おそらくその公共社会学アスピレーションが最も目立つのはフロリダ・アトランテック大学社会学であろう。そのウェブサイトは社会学を学問的営みとヒューマニティの奉仕活動の両方であると定義する合衆国内の新設の公共社会学中の学科であるとアナウンスしている (Araghi 2005)。やや当惑するのだが、ワシントン DC にあるアメリカン大学社会学はその MA プログラムに「専門社会学」への新たな集中をアナウンスしている。この集中は学生に広汎な専門職セッティングの中で社会学をどのように利用するかを教えることを意図している (American University 2005)。ここでは「専門社会学」はまた公共社会学でもある。

社会学ジャーナルのいくつかは公共社会学に別々の注目を払ったが、大半はそのメリットを評価議論するのではなく、エクササイズとしてであった。*Social Problem* 誌 (2004), *Social Forces* 誌 (2004), *Critical Sociology* 誌 (2005), *British Journal of Sociology* 誌 (2005) では特集が組まれた。*Social Forces* 誌上の論争は上記の中では最も率直で、実際に公共社会学に対する批判を含んでいた。しかし編集者 Judith Blau が *Social Forces* 誌の各号に独立の無審査の公共社会学欄を設けたときに、もっとラデカルな公共社会学強襲がすぐに実現した。ブラウはさらにその雑誌から犯罪学、公衆衛生、都市計画領域の論文は排除する声明を出した。

公共社会学を設置するための ASA 作業集団は少なくとも今日までどうにか設置されてきている。作業集団はウェブサイトを立ち上げたが大体不活発で、そのウェブ掲示板に掲示が載ることはごくまれで、近年「Zetha によって占有された」というメッセージを掲示した one Zetha によって侵入された。作業集団は公共社会学の歴史的ルーツに関するレポートを発行し、E-mail リストサーブを開始した。リストのこの時点での議論の主要トピックはスカラシップよりもアクティビズムに基づいてテニユアをどうやって獲得するか、ASA 総会に公共社会学テニユアとプロモーション・ガイドラインを支持する呼びかけであった。またもや、ASA 理事会での広報活動の結果、ASA 出版物 *Footnotes* は公共社会学の特別の欄を設けた。社会学のテキストもまたその頁の中に公共社会学をこっそり入れるようになった。

ギデンズと彼の仲間は社会学の入門書の第5版（Giddens/Duneier/Applebaum 2005）に公共社会学に関する新しい材料を付け加えた。おそらく公共社会学は社会学の戦闘員をも同じ戦いに引き込むことができるだろう。

最後に公共社会学の降臨が社会学の商業化によって促進されているのを観察することは皮肉なことかも知れないが、決してびっくりすることではない。昨年 ASA ウェブサイトは ASA の従来のロゴか 100 周年のロゴ付きの商品を学会員が購入できるオンライン上の店舗を宣伝し始めた。ビジネスと商売の事柄に関わる問題点は、デュルケムが我々に思い起こさせるように、経済的なものではなく道徳的なものである（Deflem 2004d）。ASA オンライン上の店舗（近年 ASA オンライン書店の商品部に改めた）は ASA 執行部のマネージャー化のもう一つのサインである。つまり ASA 執行部が絶望的なまでスカラシップに触れず、いかにプロフェッションから遊離しているかの証しである。ASA 会長任期中マイケル・ブラフォイのために巨大なトラベルツアーを編成することによって公共社会学を喧伝したのはこの執行部である。商業化もしかり。2004 年のサンフランシスコ集会の真に地を裂く性質を忘れるな。それは会議の手提げ袋に企業スポンサーをあしらえた最初の ASA 集会であった。

3. 結論：ジョージア社会学雑誌

一人のアメリカの社会学者となる私の旅において、私は多くの失敗をしたし、私が祖国と呼ぶこの国への移住には沢山の思い違いがあった。ベルギーの学界に巣くっている nepotistic patriarchy 縁故的家父長制とちがって、アメリカ社会学はプロフェッショナルな報酬が学者としての業績（scholarly accomplishment）に基づく開放的な職業構造を提供しているだろうと勘違いをした。かつて私はアメリカ社会は多くのヨーロッパの諸国で享受されているそれより発達の遅れた公共知識文化を持つと思ったことがあったが、それを全く持っていないとは思わなかった。私が初めて「社会学を救え」キャンペーンサイトを開始したとき、それは当時の反ブッシュ社会運動に触発されて、当時の ASA 会長マイケル・ブラフォイと公共社会学者の名声と栄光をあしらったポスターと旗を含めた。一人の大統領にとって善であることは別のものにとっても善であるはずと思っていた。しかし私のびっくりしたことには、ユーモアが社会学から燃え尽きるほど、その戦略は私が読み違えた大きなバックファイアを浴びた。しかし公共知識人としての私のコミットメントを大切にしながら、全く生きた心地がしなかったものの、私がその中で仕事をする文化により調和する仕方でも貢献しようと思った。

その制度化の成功とともに、公共社会学者はいまやアメリカ社会学の主流のひとつとなっ

てきている。白人, 男性, 中流におもに公共社会学は尊敬を集めている。一層悪いことには, 公共社会学は全く上品なものになってきている。公共社会学は叫ばない。礼儀正しい。公共社会学者がそれが何を表そうと, 彼らの活動もまたアメリカ文化の一部でありアメリカ文化が育むすべてであることに少なくとも疑念を抱かないことを切望する。公共社会学は消費者それも沢山の消費者を持っている。社会科学のファーストフードとして, 公共社会学は今では至る所にある。

だがだれひとり公共社会学の蔓延を受け入れる必要はないし, 公共社会学に対して手も足も出ないと思いきわ必要はない。最近, *Social Forces* 誌に新しい編集者が就任した。前編集者は彼女が公共社会学に取り込まれていたために更迭されたのではないかもしれないが, 公共社会学欄は雑誌から除去され, リサーチの専門性のバランスを回復した。それ故私はジョージア社会学会の会員に, 専門社会学と公共社会学を区別する要請に屈服せず, 絶対的に社会学にコミットする雑誌を設立する機会を捕まえることを呼びかける。それをジョージア社会学雑誌と呼ぼう。ジョージアの社会学者が気に入るものなら別な呼称でも良い。ただ社会学へのあなたのコミットメントを平易でシンプルに保つことだけを要望する。

文献一覧

- ASA 2003 “Proposed ASA Statement Against the War on Iraq.” *Footnotes*, April 2003.
 ——— 2004 “Theme Statement (to the 2004 Annual Meeting)”
- Burawoy, M.** 2003 “South Africanizing US Sociology.” *From the Left*, the ASA Marxist section newsletter, 24(3) : 12-13.
 ——— 2004a “Democracy in Question : Reply to Deflem.” *Footnotes*, the ASA Newsletter, July/August 2004, 32(6) : 9-10.
 ——— 2004b “To Advance, Sociology Must not Retreat.” *The Chronicle Review*, August 13,
 ——— 2005a “The Critical Turn to Public Sociology.” *Critical Sociology* 31(3) : 313-326.
 ——— 2005b “Response : Public Sociology : Populist Fad or Path to Renewal.” *The British Journal of Sociology* 56(3) : 417-432.
 ——— 2005c “Personal Ironies of the San Francisco Meetings.” *Contexts* 4(3) : 78-79.
- Burawoy, M./Erik O. Wright** 2000 “Sociological Marxism.” In J. Turner (eds.) *Handbook of Sociological Theory*. Newbury Park : Sage
- Deflem, M.** 2004a “The War in Iraq and the Peace of San Francisco : Breaking the Code of Public Sociology.” *Peace, War & Social Conflict*. Newsletter of ASA section, November, pp. 3-5.
 ——— 2004b “Letter to the Editor “The Proper Role of Sociology in the World at Large” *The Chronicle Review*, October 1, p. B17.
 ——— 2004c “There’s the ASA, But Where’s the Sociology ?” Public Forum letter. *Footnotes*, the ASA Newsletter, July/August 2004, 32(6) : 9
 ——— 2004d “Large Mug, Mouspad, Infant Creeper, Bib, Dog T-Shirt : The Professional Group Revisited.” *Perspectives*, the ASA Theory section newsletter, 27(4) : 15
 ——— 2005a “Sociologists, One More Effort ! A Propos Goodwin.” *Comparative & Historical Sociology*, ASA Section newsletter, 16(2) : 4-6.

- 2005b “Comment” (on public sociology). *Contemporary Sociology* 34(1) : 92-93.
—— 2005c “Southering Social Forces.” *The Southern Sociologist*, Newsletter of the Southern Sociological Society, 36(3) : 12-15.

Save Sociology on line campagne conducted by Deflem, M. 2004-2006

“Sociology and Politics.” <http://deflem.blogspot/2004/07/save1.html>

“ASA Resolutions 2003-2004”<http://deflem.blogspot/2004/07/save2.html>

“Public Sociology.”<http://deflem.blogspot/2004/07/save3.html>

【訳者後記】

訳出したのは、*Society* 2013年50巻156-166頁に掲載された Mathieu Deflem 執筆 *The Structural Transformation of Sociology* と *The Journal of Professional and Public Sociology* 2005年1(1)に掲載された *Public Sociology, Hot Dogs, Apple Pie, and Chervrolet* である。著者デフレムはベルギー生まれでベルギーのルーヴェン・カソリック大学を1983年に卒業、1986年に同大学修士課程修了、1990年イギリスのハル大学修士課程修了、1996年にアメリカ・コロラド大学で博士学位を得ている。2002年サウス・カロライナ大学の助教授、2005年准教授、2010年以来教授である。

最初の論文は、*Society* 誌がマンハッタン研究所と共催したシンポジウム「1960年代以降の高等教育の変貌」の登壇者として報告した原稿に加筆したものである。様々の分野の学者が寄稿している。社会学を代表して報告したのがデフレムである。

訳者がデフレムのこの論文の存在を知ったのは、Stephen Turner 2014 *American Sociology : From Pre-Disciplinary to Post-Normal* (Palgrave Macmillan) の文献一覧を通じてである。デフレムの名はそれ以前に *American Sociologist* 誌2005年36(3.4)号掲載 McLaughlin/Kowalchuk/Turocotte 共著「社会学は救われる必要がない：公共社会学の分析的省察」の中で、個人開設ウェブサイト「社会学を救え」上でブラフォイの公共社会学に対する反対キャンペーンを展開している人物として紹介されていたので知っていた。

第二の論文は、ブラフォイのアメリカ社会学会会長就任中、アメリカ社会学会の運営が政治化、ビジネス化していく様子に我慢がならない、マルクス主義社会学が公共社会学という羊の皮をかぶって学会、大学の社会学科内に浸透していく様子に我慢がならない—社会学者が、上記のウェブサイト「社会学を救え」に掲載したり、ASA全体や個別部会のニューズレターに寄せた意見、告発、異議申し立てをまとめたものである。特にこの論文は、ASA公共社会学部会が発行する雑誌創刊号に、自分たちグループの批判者であるデフレムに直々に寄稿を依頼してきたものである。第一論文では極力トーンを抑えていたデフレムがアメリカ社会学会の質的劣化の指摘、ブラフォイが会長であったときの学会執行部のやり方に行った痛烈な批判の内容を知るのに格好のものである。

前述の Stephen Turner の著書は、1990 年に彼が Jonathan Turner と著した著書 *The Impossible Science. An Institutional Analysis of American Sociology* が 1989 年、絶頂期の 60 年代以降で社会学専攻生の登録、修士、博士学位取得者が最低を記録し、社会学人気がもっとも低迷した時期で考察を終わっているため、その後の 25 年を新著の後半部分で取り上げたものである。Stephen Turner の著書は、社会学専攻生、学位取得者の回復が女性の社会学専攻希望者の増加によることと、しかしながらアメリカの社会学界のエリート大学によるヘゲモニーの不変、それを可能にしている構造（アメリカ社会学会要職の寡占と ASR,AJS 掲載寡占によるジョブマーケット支配）に着目している。

デフレムの第一論文は、最近のアメリカ社会学会会員の増加、大学の社会学専攻者数の回復に焦点を当てながら、学会会員である学者、教員と、彼らのテーチングを受ける学生の（量的復活だけで喜ばない）質的劣化を問題にしている。ステフェン・ターナーのアメリカ社会学の現状分析とはひと味違った考察が味わえる。

なお Stephen Turner/Jonathan Turner 共著 *The Impossible Science. An Institutional Analysis of American Sociology* 1~4 章の翻訳は訳者が教養学部論集 167, 168 号（2014 年）に「自然科学のようになれない社会学」と題して掲載している。関心のある向きは参照されたい。